THE MICRONAUTS
Damaging Consent &
A Remixes Retrospectives
(JPN) P-VINE / PCD-17174/5
3月7日発売

僕は、ラフでダーティーなサウンドを扱うのが嫌いじゃない。
明日の美は、その裏側に隠れていたりするからね。

THE MICRONAUTS

フレンチ・タッチの裏側がつまったダーティー・ブリープ・サウンド

interview & text FUMINORI TANIUE

ミクロノーツの名で知られるプロデューサー、クリストフ・モニエ。'90年代初頭からロッキンでヘヴィなトラックを数多く手がけてきた彼は、フランス産ダンス・ミュージックのアンダーグラウンド・サイドを体現する、知る人ぞ知るベテラン・アーティストだ。

そんな彼が、ヴィタリックのレーベルCITIZENから、近年の音源と過去のリミックス音源をまとめた2枚組CD『Damaging Consent & A Remixes Retrospectives』をリリースする。『Bleep To Bleep』('00)以来約8年ぶりとなる、待望のアルバム作品だ。まずは、本作のテーマについて聞いてみた。

「タイトルは、エドワード・S・ハーマンとノーム・チョムスキーの共著『マニファクチャリング・コンセント マスメディアの政治経済学』('88)から取ったんだ。彼らはこの本で、マスメディアが政治・経済的エリートのための声になっているため、大衆世論はエリートの意見や動向を黙諾してしまっている、と述べている。で、僕の考えでは、ダンス・ミュージックとは、そんな大衆の違った面を味わえる魅力的なものなんだ。つまり、音楽で黙諾にダメージを与えられるということさ」

そんな本作のサウンドは、「The Beat」や「Sweat」を筆頭に、全編通じてブリーピーなものばかり。ミクロノーツならではのフリーキーな電子音を凝縮した内容となっている。曲づくりで意識したことは何だったのだろうか？

「結構、即興演奏をしたね。それを録音して、後から良いものだけを選んでいったよ。僕は、ラフでダーティーなサウンドを扱うのが嫌いじゃない。明日の美は、その裏側に隠れていたりするからね」

こうした彼の音楽センスは、原型をとどめないほど変形させた、ケミカル・ブラザーズやアンダーワールドらのリミックスでも顕著だ。リミックスで意識している点は何なのだろう？

「新しいコードを考えることさ。原曲とは違う要素を入れたいからね」

ニュー・エレクトロが注目されるはるか以前から、その先駆けとも言えるマッドなトラックをつくり続けてきたミクロノーツ。最後に、彼がダンス・ミュージックに傾倒したきっかけを聞いてみた。

「最初、僕はギターで曲を書き、バンドを組んだりしていたんだ。でも'88年にシカゴのアシッド・ハウスと出会い、衝撃を受けたんだ。一気に世界が開いた感じだったね。機械的でありながらファンキーで、メンタルでありながらフィジカルで、冷たいのに暖かい。追い求めていた音楽が見つかった瞬間だったよ」